宮古エクステンションセンターだより　宮古市

宮古エクステンションセンター
特任専門職員　浜田　修

今回は、宮古市観光港湾課にご協力いただき、冬のグルメイベントをご紹介いたします。夏はもちろんですが、冬も様々なイベントが開催されます。また、冬期間(11月1日～3月31日)は、浄土ヶ浜への一般車両乗り入れも可能となっておりますので、是非、冬の宮古へいらしてください。

宮古市は人口約55,000人で本州最東端に位置しています。浄土ヶ浜や三王岩などのジオポイントにも指定されている景勝地があり、夏季には大勢の観光客が訪れます。

しかし、あまり知られていないのが宮古市のグルメ。秋にはサンマまつり、冬には鮭・あわびまつりが開催されます。さらに毎年2月下旬には「毛ガニ祭り」が行われます。宮古の毛ガニは小ぶりですが身がしまりミソが濃厚で、一番おいしく食べられるこの時期に開催されています。魚市場で開かれるこのお祭りは、毛ガニや海産物が安価で販売される他、毛ガニ汁のお振舞や毛ガニの一本釣り、お楽しみ抽選がありお客様には毎年喜んでいただいています。

毛ガニの一本釣り

茹でた宮古産毛がに

また、餅まきやダンスショー、歌謡ショーも行われ、厳寒の2月開催ではありますが大変賑わいのあるお祭りです。

さらに、魚市場の向いには「道の駅・みなとオアシス　みやこ」こと「シートピアなあど」があります。野菜や海産物の産直、宮古の塩を使ったここでしか販売されていないお菓子もあります。駐車場にあるファーストフードでは、宮古沖の海洋深層水を使用した「海のソフトクリーム」が販売されています。ほんのり塩味のする淡い水色をしたご当地ソフトクリームです。宮古市にお越しの際は堪能してみてはいかがでしょうか。

海洋深層水を使用した
海の恵みソフトクリーム
(ポスター)

また、宮古市は真鱈の水揚げ量日本一を誇ります。真鱈は12月～2月にかけて旬を迎え、市内の飲食店ではさまざまな工夫を凝らした料理が提供されています。また、真鱈の白子は「キグ」と呼ばれ1月～2月に一番おいしくなります。どうぞ、旬のおいしいものを食べに、宮古におでんせ～。

生涯学習部門の紹介

日本では大人の学びの場として公民館が大きな役割を果たしてきました。特に、戦後、地域の住民たちが公民館に集まって、身近な生活課題をはじめ社会的課題を議論し合いながら実践し、日本社会を変えていたのです。このような学びの場には、専門的職員として社会教育主事が行政と住民の橋渡しの役割を担いながら地域住民の学習を支えてきました。

しかし、日本政府は小泉内閣発足後に「公設民営化」が急速に進行し、2003年に指定管理者制度を導入しました。当制度を導入する理由の一つとして挙げられたのが、“住民のニーズの多様化に「効果的」「効率的」に対応するためには、民間の事業者のノウハウを広く活用することが有効であること”でした。

したがって、近年では社会教育施設も余儀なく民間委託が進められ、社会教育主事の配置も縮小されつつあります。その結果、社会的弱者(高齢者、若者、女性、外国人など)は、ますます学ぶ機会が閉ざされ、学習者においても格差が広がっています。

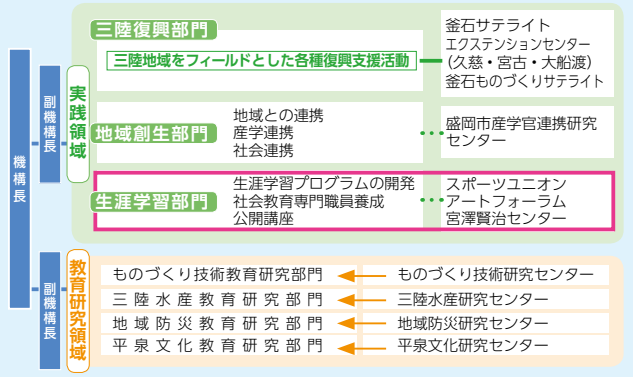
一方、グローバル化や知識基盤社会に対応できる人材が求められている中、大学教育が既存の若い学習者を中心とした教育から成人学習者への拡大が期待されている中で、“大学はリカレント教育の場”としての転換が求められています。

そこで高等教育機関がリカレント教育の場として機能を果たすためには、まず、地域住民のニーズの把握が欠かせません。また、地域課題に対応できる人材を育てるためには何に重点を置くべきなのか、真剣に向き合わなければなりません。

よって生涯学習部門では、上記の課題の可視化を図るとともに、地域人材づくりのために学社連携の視点から生涯学習事業に取り組んでいきたいと思います。

なお、生涯学習部門では、研究成果を生かした地域還元を目指しながら、①基礎研究(地域調査など)、②社会人学び直しプログラムの開発、③社会教育主事養成、④公開講座、⑤学内・外連携事業などを通して、誰でも、いつでも参加できるような地域住民の生涯学習場づくりを目指します。

●三陸復興・地域創生推進機構組織図



Information

公開講座

「かんじきをはいて冬の森を歩こう」　2/19(日)

滝沢演習林では、毎年冬の演習林散策と自然の観察「かんじきをはいて冬の森を歩こう」を開催しています。今回も、かんじきを履いて冬季の滝沢演習林を散策し、自然観察・アニマルトラッキングなどを行います。 冬の森林と親しむことを通して、森林保全に関わる理解の深化を図ります。

●会場／農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター滝沢演習林
●時間／13：00～15：30　●対象／市民一般
●募集人数／20名　●講習料／無料

かんじき体験 御明神の山を歩こう！　3/12(日)

3月の御明神を、かんじきを履き、散策・観察をして、かんじきの体験と自然観察を行う。

●会場／農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター御明神総合施設
●時間／9：00～13：30
●対象／一般親子（子は小学生以上）
●募集人数／10組または25名
●講習料／無料（別途保険料100円、昼食代400円）

フィールドセミナー ー春を迎える森をみるー　3/26(日)

滝沢演習林で冬越しをすませた森の生き物を観察し、春を迎える森の様子、生きものの姿について理解を深めてもらう。

●会場／農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター滝沢演習林
●時間／9:30～12:00
●対象／市民一般、親子
●募集人数／20名
●講習料／無料

▼上記の公開講座の問い合わせ先は下記のとおりです
地域連携・COC推進課（土日祝日除く9:00～17:00）　TEL:019-621-6492／FAX:019-621-6493　E-mail: renkei@iwate-u.ac.jp

フォーラム

第6回全国水産系研究者フォーラム　2/15(水)

多くの自然災害を経験してきた岩手県に全国の水産研究者等が集まり、本フォーラムを通じて、次世代水産業創生に向けて研究者は何をすべきかを考え、実践するためのネットワーク形成について議論する。

●時間／13:30～17:30
●会場／ホテルメトロポリタンニューウイング盛岡・4階・メトロホール西の間
●対象／研究者、水産関係者、市民一般　●募集人数／150名　●参加費／無料

▼問い合わせ先
岩手大学 三陸復興支援課　（釜石サテライト）
TEL:0193-55-5691／FAX:0193-36-1610／E-mail:kamaishi@iwate-u.ac.jo

Together with Iwate and its people

岩手大学三陸復興・地域創生推進機構レター

いわての“大地”と“ひと”と共に

VOL. 3 NEWS LETTER

http://www.iwate-u.ac.jp/koho/newsletter.shtml ◁岩手大学ホームページからもご覧いただけます。

国立大学法人 岩手大学
地域連携推進部
地域創生推進課

〒020-8550
岩手県盛岡市上田 3-18-8
TEL.019-621-6629
FAX.019-621-6999
E-mail. sanriku@iwate-u.ac.jp

平成 28 年 12 月 26 日発行

三陸復興・地域創生推進機構発足記念シンポジウム開催

岩手大学では、11月25日に復興祈念銀河ホールを会場に三陸復興・地域創生推進機構発足記念シンポジウムを開催しました。

シンポジウムでは岩渕明学長による主催者挨拶の後、三陸復興・地域創生推進機構長を兼ねる菅原悦子復興・地域創生担当理事から、岩手大学の機能強化における震災復興・地域創生の位置づけ、更に新たに設置した機構の役割や特徴などの概要説明がありました。

三陸復興・地域創生推進機構の概要説明を行う菅原理事

次いで、文部科学省科学技術・学術政策局 坂本修一産業連携・地域支援課長から「文部科学省のイノベーション政策展開の方向性」と題した特別講演があり、オープンイノベーションに求められる大学の役割やオープンイノベーション加速に向けた産学共創モデルの考え方などが紹介されました。

文部科学省科学技術・学術政策局 坂本産業連携・地域支援課長の講演

また官の立場から、本田敏秋遠野市長が「『遠野スタイル』によるまちづくり2016」と題して、人口減少のなか、国や県などに頼らず基礎自治体として出来ることに挑戦し続ける「遠野スタイル」の基本理念や個別の事例紹介、さらに岩手大学への期待が述べられました。

本田遠野市長の講演

坂本産業連携・地域支援課長、本田遠野市長、岩渕学長の3名による「地域創生における大学の役割」をテーマとした鼎談では、地域を先導する人材やリーダーシップの重要性、地域の社会システムを変えるイノベーションの必要性、地域を変革するための大学の役割について忌憚のない意見が交わされ、地域創生における大学の重要性が再認識されました。

岩渕学長（右）、坂本産業連携・地域支援課長（中央）、本田遠野市長（左）による鼎談

がんぷくカフェを開催しています

岩手大学三陸復興・地域創生推進機構では、復興について考える「岩大×ふっこうカフェ（通称:がんぷくカフェ）」を10月から定期開催しています。

がんぷくカフェ風景

11月1日に開催した第2回目のがんぷくカフェでは、地域コミュニティ再建支援班の一員として震災直後から、陸前高田市を拠点に活動している人文社会科学部の五味壮平教授を話題提供者に迎え、「災害後、大学&大学生にできることってなんだろう」をテーマに参加者と一緒に復興について考えました。

五味教授は話題提供で、これまでの取り組みを紹介すると共に、この活動は、ボランティアや支援というよりも陸前高田市を訪れる度に、色々な魅力に触れることが出来る「伴奏的主体の取組」であると話されました。

陸前高田市出身の参加者からは、五味教授が震災から今まで継続して取り組んできた活動に対して謝辞が述べられると共に、「五味教授が発行したフリーペーパーが地元の方々の安否確認を出来る貴重な情報源となった。また地元の人々は、外部の人だから話しやすいこともある」、「これだけずっと見守ってくれて心強い。故郷を亡くしたという喪失感があったが、今回参加し、気持ちが軽くなった」などの感想が聞かれました。

話題提供者の五味教授

また学生からは、「東北以外の出身であるが、授業などで折に触れて、先生方が被災地で取り組んでいる活動が話される。またこのような機会があるのは被災地にある大学ならでは。今後も復興について考えていきたい」などの意見も出ました。

第4回目のがんぷくカフェは、震災復興の語りや根浜海岸の再生等に尽力されている釜石市の旅館「宝来館」の女将である岩﨑昭子氏を話題提供者としてお招きする予定です。ご興味ある方は是非ご参加下さい。

次回告知

がんぷくカフェvol.4

日　時／平成29年1月10日(火)18:00～19:00(受付17:30)
場　所／盛岡市産学官連携研究センター(コラボMIU)1階
参加費／100円(お茶代)学生は無料
申込先／岩手大学地域創生推進課
TEL:019-621-6629／MAIL:sanriku@iwate-u.ac.jp

台風10号緊急報告会を開催しました

8月31日に発生した台風10号は、気象庁が統計を開始して以来、初めて東北地方太平洋側に上陸し、県や市町村が管理する道路や河川などの土木施設が約2,800カ所で損壊しました。住宅の被害では全壊が379棟、半壊が2,094棟、一部損壊や床上、床下浸水を含めると4,000棟以上が被害に遭いました。

経済面でも被害総額が約1,394億円に達し、東日本大震災をのぞくと、岩手県の災害による被害額としては過去最大のものです。

岩手大学では、台風10号直後の9月3日（土）から毎週末、被害の大きかった久慈市、宮古市、岩泉町にボランティアバスを17回運行させ、学生中心に延べ411名のボランティアがドロ上げや被災家財の運搬などの活動を行いました。

また、地域防災研究センターでは、久慈市、宮古市、岩泉町に入り、河川の水害調査、流木被害、土石流及び土砂災害の実態調査に取り組んでいます。

台風10号から一ヶ月半を経過した10月15日にそれまでの調査結果を基に、一般市民を始め防災関係者、行政関係者、教育関係者を対象とした台風10号災害緊急調査報告会を開催しました。

岩渕学長の挨拶

報告会では、岩渕学長の挨拶後に、南地域防災研究センター長から東日本大震災を踏まえて取り組んできた地域防災の各種活動を紹介すると共に、地域防災研究センターの各教員から「台風10号による岩手県の被害概要及び岩泉町小本川の水害調査報告」、「台風10号による久慈川水系を中心とした流木被害」、「台風10号による土石流の調査」、「台風10号により岩泉町及び宮古市における土砂災害の実態調査」、「台風10号による岩泉町の被害状況と今後の課題」と題した報告を行いました。

南地域防災研究センター長から各種取組の報告

地域防災研究センター兼務教員である井良沢農学部教授からの報告

参加者からは、流木被害や土石流被害の発生メカニズムに関して熱心な質問が出されると共に、地域全体で防災を考える必要や地域における防災リーダーの育成の必要性などについて意見交換がなされました。

本学では東日本大震災の支援活動で得た経験を踏まえて、地域防災研究センターを核とする岩泉支援チームを設置し、台風10号の被害の大きかった岩泉町の防災教育やコミュニティ支援に取り組んでいきます。

もみ殻培地セミナーを開催しました

三陸復興部門園芸振興班では、東日本大震災後、三陸沿岸の夏の涼しさを生かした園芸産地づくりを目指し、経験の浅い者でも取り組める園芸作物の導入や栽培技術の提供を行うと共に、ブランド化と収益性が期待される野菜品目としてクッキングトマトや夏秋どりイチゴ、ミニカリフラワーに着目し、現地での栽培普及活動を展開しています。

特に初心者でも夏秋どりイチゴの栽培に取り組めるように、生もみ殻と土を混合し、これに肥効調節型の肥料と炭を加えたもみ殻培地と不織布を使った高設栽培装置を開発。この培地や栽培装置が、県内の農家で冬春どりイチゴやトマト、葉菜類の栽培にも使われるようになり、今後もみ殻培地の導入を考えている農業関係者や既に取り組んでいる農家を対象に、11月9日にもみ殻培地セミナーを開催しました。

セミナーでは、最初に「もみ殻培地」開発者の明治大学農学部の小沢特任教授から、もみ殻培地の「安価、軽量、簡単」であるという特性、もみ殻培地で生育された水田トマト、キュウリの事例などが紹介されました。

園芸振興班長である農学部・松嶋准教授から、もみ殻培地での灌水や施肥のタイミングなどについて説明が行われました。

最後に「もみ殻培地の長所・短所」をテーマに、県内で、もみ殻培地を使って夏秋どりイチゴやクッキングトマトに取り組んでいる4名の農業者から、事例報告があり、もみ殻培地の適切な利用方法について意見交換がなされました。

もみ殻培地でトマトを育成している営農者の報告

また、セミナー前には学内の圃場で、もみ殻培地高設栽培装置の見学を行い、参加者からは、もみ殻培地の利用可能期間や肥料の種類などについて熱心に質問が出されました。もみ殻培地は、他の培地に比較し、5分の1程度の比重なので、農作業の軽減化につながると期待されています。

三陸復興・地域創生推進機構では、今後もこのようなセミナーを開催し、もみ殻培地や高設栽培技術の普及に努めていきます。

もみ殻培地高設栽培装置を説明する岡田客員教授

ものづくり技術研究センター看板除幕式・特別講演会を開催

ものづくり技術教育研究部門を担うものづくり技術研究センターは、12月1日に看板除幕式と特別講演会を開催しました。

看板除幕式では、冒頭、岩渕学長が今年4月に工学部附属研究施設から全学センター化した経緯や今後に対する期待などについて述べるとともに、平塚ものづくり技術研究センター長と一緒に看板除幕を行いました。

新たな看板は、ものづくり技術研究センター内の鋳造技術研究センターと連携している水沢鋳物工業協同組合が製作したもので、まさにものづくり技術研究センターに相応しい看板となりました。

除幕式後の特別講演会では、工学部の卒業生である室蘭工業大学の桃野正名誉教授から「鉄の記念日−岩手の鉄文化とたたら製鉄−」と題した基調講演が行われ、たたら製鉄の歴史や岩手出身で近代製鉄の父といわれた大島高任について講話いただきました。

さらに特別講演では、株式会社水沢鋳工所の田村直人氏から、「“南部鉄器　極め羽釜”の製造秘話」と題して、象印マホービン株式会社の依頼で製作した高級圧力IH炊飯ジャー「南部鉄器 極め羽釜」の羽釜（内釜）の完成までの秘話をお話しいただきました。試行錯誤の末、完成した「南部鉄器 極め羽釜」は、お米が大粒でふっくら炊きあがるということで平成25年度ものづくり日本大賞特別賞を受賞しています。

最後に、ものづくり技術研究センターの3センター（金型技術研究センター、鋳造技術研究センター、生産技術研究センター）と釜石ものづくりサテライトの取り組みと今後の展望について、それぞれのセンター長と班長が報告しました。

看板除幕式と特別講演会の開催日である12月1日は安政4年(1857)、釜石市に日本で最初の洋式高炉が造られ、初めて火が入れられた日であり、これを記念して「鉄の記念日」に制定されています。ものづくり技術研究センターは、地域にとって、ものづくり分野における灯火となるようなセンターを目指していきます。

看板除幕式（岩渕学長（左）と
平塚ものづくり技術研究センター長（右））

桃野室蘭工業大学名誉教授の基調講演

（株）水沢鋳工所の田村直人氏の特別講演

三陸復興・地域創生推進機構首都圏向け報告会を開催

岩手大学の取組を紹介する岩渕学長

12月11日に水産分野で連携している東京海洋大学の品川キャンパスを会場に「岩手大学の新たな挑戦−岩手の“大地”と“ひと”と共に−」と題した首都圏向け報告会を開催しました。

東日本大震災から5年9ヶ月が経過し、震災の記憶が風化する首都圏において、三陸復興・地域創生推進機構として復興状況や現在の課題を幅広く紹介する初めての報告会です。

当日は、同窓生や三陸地域出身の首都圏在住者、被災地で復興支援活動に携わった方など多数ご来場頂きました。

岩渕学長が震災復興・地域創生に向けた取組や次世代を担う人材の育成の取組などを紹介し、三陸復興・地域創生推進機構長である菅原復興・地域創生担当理事は機構の概略と三陸地域における今年度の具体的な復興推進活動などを説明しました。

また学生の取組事例として、「住民のこころに寄り添う」を理念に掲げ、子どもの遊び場づくりや仮設住宅でのコミュニティ支援に取り組んでいる「三陸復興サポート学生委員会」と、陸前高田市や大槌町のお祭りを支援する「地域の祭りを盛り上げ隊」の2団体からそれぞれの活動を発表しました。来場者からは、「参加するお祭りの起源などを調べれば、より深く地域と関われるのではないか」など、今後活動する上で有益なアドバイス頂き、学生にとっても良い刺激となりました。

最後に地域コミュニティ再建支援班長を務めている広田教授が高台移転等に伴う地域の再編問題や災害公営住宅でのコミュニティ形成、さらに大槌町における総合的コミュニティ形成支援について具体的な事例を踏まえた講演を行いました。

三陸復興サポート学生委員会による
取組事例紹介

同班の船戸特任研究員からは、陸前高田市の災害公営住宅で行っている自治会設立支援への取り組みについて実際現地で撮影した動画を活用して説明を行いました。

報告会と同時開催したパネル展

意見交換の時間では、来場者から、現地の公共交通機関の復旧状況、台風10号被災地域における岩手大学の今後の具体的な活動内容などの質問や自然豊かな三陸地域の観光資源を活用した観光分野の提案など多様な御意見を頂き、岩手大学への期待の高さがうかがわれました。

会場では学外の方々の意見を今後の活動に広く取り入れるため、岩手大学三陸復興・地機創生推進機構サポーターの募集も行いました。今後も学外への情報発信を通じて被災地の状況を紹介すると共に、多様な意見を参考にしながら復興推進動に取り組んでいきます。